
私がなぜ現在の科目を選んだか

「作業療法学」

信州大学医学部保健学科作業療法学専攻

岩波 潤

私の実家には、ビーズでできた暖簾があります。それは、色とりどりのビーズでリンゴの木々が描かれている特別な暖簾です。

私が高校生の時、祖母は脳卒中になり片麻痺などの後遺症により日常生活に支障が出てしまいました。病気になる前は、厳しいながらも「一生懸命勉強しなさい」と私を励ましてくれる優しい人でしたが、片麻痺による日常生活の困難さを目の当たりにし、ひどく落ち込んでいた姿を覚えています。

ある日、病院へお見舞いに行くと、祖母のリハビリ場面を見学する機会がありました。邪魔をしてはいけなくて窓越しの様子を伺った私の目に映ったのは、楽しそうに作業活動を行っていた祖母の姿でした。祖母の病気が治ったわけでも、右手の麻痺がなくなったわけでもありません。それでも病気になる前のような笑顔を見せていたのです。その笑顔を見た時、自分もい

つか、病気や怪我で苦しむ患者さんをこんな風に笑顔にしてあげられるようになりたいと思いました。

リハビリテーションは病気や怪我などで低下した機能や生活能力を改善させることが一つの目的です。もちろん、病気になる前のレベルまで戻れば最善だと思いますが、必ずしもそれを達成できることばかりではありません。そんな中、作業療法では、低下した機能や失った能力を改善させるだけでなく、それを補うような道具の工夫、環境の利用を通じた能力の再獲得を目指したり、新たな役割や趣味的な活動を獲得したりする働きかけも行います。まさに QOL（生活の質）を向上させることができる作業療法は、高校生だった頃の私の理想そのものでした。本原稿のテーマである「なぜ現在の科目を選んだか」と聞かれば、患者さんを笑顔にできる職種だと思ったからが答えになるでしょう。

実家に帰るたびに見かける祖母が作った暖簾は、いつも私の原点を思い出させてくれると共に、「一生懸命勉強しなさい」という祖母の声に激励されているような気持ちにさせてくれるのです。

(信大大学院平31年卒)

私がなぜ現在の科目を選んだか

「放射線科」

信州大学医学部画像医学教室

平林 茉莉香

私が医師を目指したのは、特に大きなきっかけがあった訳ではなく、手塚治虫先生の「ブラックジャック」や様々な医療ドラマなどの影響からでした。そこからインスパイアされた理想の医師像を胸に、研修医の時は、深く患者さんに向き合えそうな内科を志望していました。

医師としてCTやMRIなどの画像検査は避けて通れませんので、放射線科での研修をなんとなく選びました。そうして、そこで今までの医師像が覆されました。

医師は患者さんと接することが主だと思っていたのに、放射線科ではひたすら画像に向かいます。画像の所見から病気を探し、診断をつけるのです。最初はそこに違和感を覚えました。しかし、主治医と放射線科医が画像を前にしてCT室やPHSなどで話し合っている姿をよく見かけ、時には、その所見一つで手術が

決まることもありました。治療方針が変わることもありましたが、目の前に患者さんはいないのですが、確かに患者さんを診ているのです。その姿に放射線科に興味を持ち始めました。

さらに、放射線科は診断だけでなく治療にも携わることができました。一つは放射線診断医が行うIVR、一つは放射線治療医が行う放射線治療です。IVRでは血管内からのカテーテル操作で、癌を治療したり出血部を止血したりします。放射線治療は放射線により癌を治療し、時には疼痛緩和目的に行うこともあります。いずれも比較的低侵襲であり、年齢を問わず開かれた治療だと感じました。

「正しい診断なくして、正しい治療はできない」放射線科の勉強会で聞いた言葉がすっと胸に落ちました。そのような姿勢こそが理想の医師であると気付き、それが実現できる放射線科に入局することに決めました。

放射線科2年目となり、画像を通して患者さんに向き合っているのだと日々と実感するようになりました。画像の表層だけを捉えるのではなくその背景まで見通し、より良い治療に結びつけられるよう努力したいと思います。

(富山大平29年卒)